

於陵先生印全集

第四卷



谷崎潤一郎全集 第四卷

定價二八〇〇圓

昭和四十二年二月二十五日初版發行
昭和四十八年一月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高梨茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一八一七

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

目次

恐怖時代

一

亡友

三

美男

一三

病蓐の幻想

一五

人魚の嘆き

一五

魔術師

二三

既婚者と離婚者

二四五

鶯姫

二五七

或る男の半日

二九五

玄井三藏

三九

詩人のわかれ

三五九

異端者の悲しみ

三七〇

晩春日記

四五一

十五夜物語

四七一

ハッサン・カンの妖術

五〇五

恐怖時代

二幕

大正五年三月號「中央公論」

人物

春藤家の太守

年齢二十七八歳、殘忍にして血を好む大名

春藤靱負

太守の親族、春藤家の家老職、四十歳ぐらゐ、奸譎なる佞臣

磯貝伊織之介

十八九歳の伶俐にして武術に達し、眉目秀麗なる小姓、太守の寵臣

細井玄澤

春藤家の醫者

珍齋

甚しく臆病で剽輕なるお茶坊主

氏家左衛門

近侍の武士、忠臣

菅沼八郎

同

お銀の方

太守の嬖妾、二十四五歳

梅野

お銀の方に仕ふる女中、三十歳前後

お由良

珍齋の娘、十六七歳、女中梅野の腰元

其の他侍、女中等數人

時——何將軍の代の何年何月とも定かならず、唯大體に舊幕時代の出來事と覺しき言語
風俗を用ふれば足る

所——江戸の深川邊の、極めて宏大なる春藤家の下屋敷

第一幕

第一場

お銀の方の部屋、正面に床の間と違ひ棚、右側に書院の窓、其れに續いて萩戸が箬まつて、戸の外は長廊下になつて居る。廊下の彼方には、宏莊な御殿の奥庭の、池だの築山だの燈籠だのが微かに見えて、西に傾いたまんまるな月が、丁度築山の松の梢の蔭に沈まうとして居る。部屋の左側は遣り水に菊の花を描いた絢爛な金襴。勿論その金襴の向うにも、立派な座敷や疊廊下が數限りなく連なつて居るらしい。

夏の夜の半分更け渡つた刻限である。部屋の上手に七草の裾模様のある白綸子の蚊帳が釣つてある。蚊帳の中に、お銀の方が蒲團の上になうづくまつて、脇息に凭れたまゝ物思ひに耽つて居るけれど、はつきりとは動作が分らない。左手の萩戸をすつかり明け放つて、女中の梅野が鳴居際に團扇をつかひながら庭を眺めて据わつてゐる。其の傍に蚊遣り火が焚かれて居る。廣い座敷に燈は僅か一點、下手の金襴に近く燭臺がぼんやり灯つて居るのみで、その外に光る物としては、沈みかゝつた月の明りと、庭先の廊下に置かれた大きな螢籠ばかりである。涼しげな夜風が折々室内へ吹き込んで、蚊やりの煙と白綸子の蚊帳をはた／＼と揺めかせる。幕があくと間もなく、次の間の時計がぢい、ぢいと九つを打つ。

お銀の方（蚊帳の中より）……………梅野、梅野、梅野は其處にお居やるか。

梅野 はい、最前から此の通り、蚊に喰はれながらちつと控へて居ります。何ぞ御用でござりまするか。
お銀の方 今の時計は、あれは何時ぢや。なんどき

梅野 多分九つでござりませう。築山の彼方に見える月影が、もう直き西へ沈む刻限でござります。

お銀の方 夏の夜は短いものと極まつて居るに、てもまあ今宵の待ち遠な。……どう遊ばした事ぞいなう。

梅野 ほんにお部屋様の氣短かな、そのやうにお急せうきなさらずと、やがてお越しになりませう程に、ちと縁先へお出遊ばして、涼みがてらに螢籠なと御覽じませ。

お銀の方 いえ／＼今宵はもうあきらめて、此のまゝ休んでしまふのぢや。どうせお越しがないものなら、螢籠も蚊やり火も皆片みんな寄せてしまふたがよい。

梅野 此の目印めじるしの蚊やり火と螢籠とを片寄せてしまふたら、お可哀さうに折角忍んでお出でなさる靉負様が廣いお庭の道に迷うて、御難澁遊ばすでございませう。それでなうても今宵のやうな蒸し暑い夏の夜に、まだ九つではなか／＼局の人々も寢靜まつては居りませぬ。かりにも男と名のつく者は、殿様の外に一人も這入れぬ奥御殿へ、掟を破つてお越しになるのは容易なことではござりませぬ。若しも誰ぞに見付かつたら、たとへ御家老の御身分でも命はないに極まつた譯、少しは時刻が遅れたとて、そのやうに仰つしやるものではござりませぬぞえ。

お銀の方 命が惜しくば來ぬがよい。命を捨てゝの戀路とは、初めからよう知れて居る筈ぢや。

梅野 あれ、あれ、御覽なさりませ。月がすつかり西へ沈んでしまひました。(庭の面も室内も更に一層薄暗く

なる）戀路の邪魔をする月影が、隠れてしまへばお庭は眞つ暗。忍んでお出でなさるには、丁度此れからが究竟くつきやうの刻限でござります。

一陣の夜風がさつと吹き入つて、一と入強く蚊帳に波を打たせる。燭臺の火が頻りに明滅する。その時何處やらで、風の音とも人の言葉とも判らぬやうなかな聲が聞える。

聲 …………… 梅野どの、…………… 梅野どの……………。

梅野 はい、（庭の方を屹と見つめて、合圖の螢籠を高く掲げながら上げ下げする）…………… 今のはたしかに、…………… もしお部屋様、お越しなされたやうでござります。早う此方こなたへお出迎へ遊ばしませ。

お銀の方はて其のやうに騒ぐには及ばぬ。妾はお越しを待ちかねて、とうに寝入つてしまふたと、そんなからきつぱりと斷りを云うて賜たま。情ないお方に用はないぞえ。

梅野 もし靱負様、…………… 此處でござります。此處でござります。……………

靱負が廊下の隅からこつそりと、這ひ上つて身を縮めながら部屋の中に這入つて来る。眞つ黒な布で覆面をして、細かい紺緋の上布に紗の羽織を着て、袴の股立ちを取つてゐる。

梅野 靱負様、先程からお待ち兼ねでござんすわいな。

靱負 し、しづかに、（覆面を脱いで袴の裾を下ろす。色白の、小太りに太つた、見るから凜々しい水際立つた男振り。につこり笑ひながら蚊帳の中を見入る。お銀の方は寝たふりをしてゐる）…………… お部屋様にはようお休み遊ばしてぢやな。

……………

梅野 なんでお休みなざりませう。あまりお出でが遅い故、焦じれて焦れて焦れ抜いて、空寝を使つておい

でなさるのでござんする。早う御機嫌の直るやうに、此れへお這入りなさりませいなあ。

梅野、靱負の手を執つて、蚊帳の方へ導かうとする。

靱負（梅野の手を振り切る）いや、今宵はそれどころではござるまいに、かねて手筈を定めて置いた大

事を前に控へながら、お部屋様にも梅野どのにも、なぜそのやうな氣樂を云うておいでなさるのぢや。

梅野 その一大事があればこそ、お部屋様には猶更お越しを待ち懂れて、御案じなされてござんする。

……それ、あの約束の時刻には、まだ一時あまりも間がござんする。（再び手を執つて、誘はうとする）

靱負（梅野の手を拂ひ除けて蚊帳の外に畏まり、お銀の方の枕許へわざとらしく慇懃に兩手をつく）お部屋様にはまだお眼

覺めになりませぬかな。はしたない痴話喧嘩は下様の女子のすることとござります。昔の誰かならば知

らぬこと、卑しい藝者娼妓のやうに不貞寝をなさるとは何事でござります。……そのやうなお心がけ

で、殿のお家を傾ける、一大事は遂げられますまい。（お銀の方、此の言葉にびつくりして、幕の上に起き直る）さ

て、頼みがひのないお方ぢや。

お銀の方 靱負どの、またそのやうな嫌味ばかり。……劍の刃を渡るやうな、危い戀路の樂みがあれ

ばこそ、そなたの惡事に加擔をするのでござんせうに、どうせ妾は素性の卑しい女ゆゑ、藝者上りが惡

ければ、嫌はうと捨てようと殺さうと、そなたの自由になさりませ。お家を乗つ取る謀が、そなた一人

の力で成就するものなら、妾を殺して下さりませ。（蚊帳の外に出て、靱負の前に立て膝して据わりながら、銀の長

煙管で煙草を吸ふ）もし靱負様、今更あまりな言葉でござんすぞえ。

靱負（ますく慇懃に頭を下げて、低い聲で軽く笑ふ）あは、今のはほんの戯れでござります。誰がお前様

の素性などを疑ふ者がござりませう。昔の事を知らぬでもない拙者奴までが、そのお立派なお姿には、勿體なくて自と頭が下ります。

お銀の方 そのやうな媚び諂ひは聞きたうもないわいの。嫌なら嫌と仰つしやつて下さりませ。

靱負 ほんの一時の戯れを、さう何時までもお氣に障へられては拙者が難儀いたします。これ梅野どの、どうぞ其方から宜しきやうに、お取りなし下されい。

梅野 妾風情の取りなしよりも、靱負様のお言葉一つで、直きにお部屋様の御機嫌が直ります。………したが、大事の前の小事とやら、もうお戯れはよい程にして、お二人様ともお仲直りを遊ばした方がようござります。何ぞ密々の御談合でもござりますなら、妾は一と先づお次の間へ御遠慮いたして居りませう。

靱負 これ梅野どの、今も拙者が申した通り、遠慮するとは意地の悪いお氣遣ひぢや。毎度ながら、其方の智慧を借用したい儀もござる。是非とも今宵の相談に與つて頂かねばなりますまい。………何は兎もあれ、廊下の雨戸が開いて居ては無用心、憚りながら彼處を締めて下さらぬか。

梅野 畏まりました。

梅野立ち上つて、左側の庭に臨んだ廊下の雨戸を靜かに締めて、螢籠と蚊遣り火を奥へ運び去る。それから右側の金襴を悉く明け放ち次の間の様子を窺つた後、燭臺を室の中央に据ゑて蠟燭の心を剪る。室内が急に明るくなる。

梅野 さあ、かうしてしまへばもう大丈夫でござります。お屋敷内でも殊更遠くかけ離れた此のお局のお庭先へ、こんな夜更けに誰も参りはいたしません。どうぞ御安心遊ばして、何事なりとつくり御相談

なさりませ。

靱負（お銀の方の前へ両手をつく）お部屋様にはまだ御立腹でござるかな。あまりおむづかりなされては、又梅野どのに笑はれる事でござらう。よい加減にして拙者をお赦し下さらぬか。

お銀の方（笑ひながら冗談のやうな調子で）赦し難き奴なれど、大事な話とあるからは、今宵はゆるして進ぜませう。……さうして相談と仰つしやるのは、どのやうな事でござんすぞえ。

靱負 その相談は先づゆつくりとくつろいでお話し申すでござらうが、今宵に限つて酒がなうてはあんまり淋しい。なう梅野どの、とても事にもう一つ心配しては下さらぬか。

梅野 ほんに忘れて居りました。宵のうちから御酒の用意は整へて置きました程に、唯今此れへ持つて参ります。……（立ち上る）さうしてせいせいするやうに蚊帳を外してしまひませう。

梅野蚊帳を外して次の間へ持ち去り、唐草の金蒔繪の膳に酒肴を載せて捧げて来る。お銀の方と靱負は坐を改めて席をひろげる。

梅野（兩人の間へ膳部を置き、靱負に緞子の坐蒲團をすゝめる）さあ、此れへお直りなさりませ。お酒が出れば御斟酌には及びませぬ。お仲直りのお印に、^{しるし}妾のお酌で、先づお部屋様から一こんお乾しなさりませ。

兩人酒を飲み始める。お銀の方も男に負けず杯の数を重ねる。

靱負 してお部屋様には、今宵の手筈によもお手ぬかりはござりませぬな。……

お銀の方（不愉快らしい顔つきをする）靱負どの、話の腰を折つては濟まぬが、今宵に限つてさういつ迄も改まつて、「お部屋様」と仰つしやるのはお止めなされて下さりませ。ほんに窮屈な。……

靱負 あはゝゝ、そのお許しが出たからは、「お部屋様」は止めにいたさう。……さうして先夜の話の事は、うまく運んだでござらうの。

梅野 お氣づかひには及びませぬ。お部屋様の御云ひ附け通り、妾がすつかり彼の玄澤を云ひくるめて、納得させて置きました。……今宵丑の刻を合圖に時を違へず此の長廊下の東の隅の床下へ、そつと忍んで參るやうに、申し付けてござります。

靱負 はてさて其れは御苦勞千萬。……大丈夫とは存じ居つたが、てもあの玄澤め、よくも容易く承知いたしましたものでござるわい。

梅野 一大事を打ち明けた其の後で、若しも納得しなければ斯うする（右の手で人を殺す意味を暗示する）積りでござりましたが、つね／＼から慾深で女好きの玄澤ゆゑ、恐々ながら納得して、御註文の毒藥を、今宵手づからお部屋様へ差上げると申しましたわいな。

靱負 成る程それはさうでもござらう。……なうお銀の方、味方が殖えて結構ぢやが、此の御家中でそなたの昔を存じて居るのはあの敷醫者と拙者ばかり、年は取つても相手が色事師の玄澤では、どうやら拙者も氣がゝりぢや。

お銀の方眉をひそめて黙つて靱負を睨めつける。

梅野 おほゝゝ、そのやうな御心配は御無用でござんすが、あの玄澤はかね／＼から身の程も知らないで勿體なくもお部屋様へ横戀慕をして居る様子、それ故にこそ今度の事も納得したのでござりませう。藥の調合に事寄せて、せめてお側へ近づきたいのが、彼奴の腹でござんする。——後でどのやうな難

題を云ひ出さぬとも限りませねば、お部屋様にも御用心遊ばしたがようござります。

靱負 それでなうても口説上手なあおの玄澤、拙者も用心せねばならぬて。

お銀の方 えゝ又しても愚かしい悪推量……：……かりにも大望をお抱きなざる靱負殿がそのやうな狭い御了見では覺束なうござんすぞえ。ちとおたしなみなさりませいなあ。

靱負 此れは強いしつべい返し、そのお言葉には拙者一言もござらねど、さて色戀の道ばかりは男も女も愚かになるが當り前、ましてそなたと玄澤では、つい悪推量もしたくなるでござらうが。……

お銀の方 ほんに憎らしい舌の根ちや。好い程になさらぬと、もう／＼今度は許しませぬぞえ。(火のついた煙管の雁首で、男の太股をぐいと突く)

靱負 はてまあ御許し召されい。今のはあれは冗談でござる。あはゝゝゝ。

お銀の方 つまらぬ邪推をなさらずと、若し玄澤が無體なことを云ひかけたら、後とも云はず斬り捨てゝおしまひなさるがようござります。

靱負 仕儀によつたらさう致すより外はない。しかし此の先どのやうな役に立たうも知れぬ男、成るべくならば慾と色とを餌にして、當分釣り寄せて置きたうござる。

お銀の方 それを妾も知らぬではござんせぬ。慾に眼のないばかりか、身の程知らずの横戀慕が此方の附け目、今宵此の場へ參つたら、手管一つで操あやつなして、裏の裏を搔いてやる妾の腕前を、まあ物蔭で御見物なさりませ。

靱負 そなたの凄腕前なら、拙者の胸にも覚えがござる。見物せずとも大丈夫ぢや。

梅野 それはさうと、その毒藥が手に入つてからの大事な仕事は、誰の役目でございます。

靱負 さあそれぢや。今宵の相談と申すのは、其の事でござるわい。……誰ぞ奥方のお側に侍る衆のうちに、頼める人はござるまいか。梅野どのにはよいお考へもござらぬかな。

梅野 妾もそれには苦勞いたして居ります。お側の衆は多勢居ても、迂濶に頼めはいたしませぬ。……

…はて、何ぞよい思案はござりませぬかなう。

お銀の方 そなたは妾の智慧袋ぢや。何ぞよい工夫をして賜らぬか。

梅野 おゝ、よい事がござります。(ふと思ひ付いたやうに膝頭を打つ)妾が長年召し使うて居ります、腰元の

お由良の父親ていおや——あのお茶坊主の珍齋をお頼みなさりませ。あの親父おとめを威嚇おどかしたら、必ず嫌とは申しますまい。

靱負 いかさまお茶坊主の珍齋なら、勝手氣儘に誰の傍へも馴れ近づいて、可愛がられる剽輕者、仕事をするに便利はござれど、てもあのやうな臆病者では……

梅野 たよりにならぬと仰つしやるのでござりまするか。

お銀の方 梅野とした事が、不思議なことを云ふではないか。臆病で剽輕で輕口ばかり叩いて居る、珍齋のやうな男の數にも這入らぬ者に、めつたな事は明かされまいぞえ。

靱負 女子供の相手をさせて、座興を添へる道具には、至極重寶な人間なれど、云はゞ下様しもさまで幫間はうかんなど、申す輩やからに同じこと、大事を頼むはいかゞでござらう。……それとも梅野どのには、何か彼の男あに見どころがござるかな。